

飯田龍太の俳句

——第一句集『百戸の谿』より——

太 田 か ほ り

〔要旨〕平成十九年二月二十五日、俳人飯田龍太が八十六歳の生涯を閉じた。父飯田蛇笏から継承した「雲母」を九百号を以って平成四年に終刊してより現俳壇の表舞台からは退き、その後も俳句界を陰から支え、広く尊敬を集めてきた。格調高い俳句作品、毅然たる俳句観はじめ評論や随筆に優れ、指導者としても大きな力のあった龍太を惜しむ声が俳壇を覆い、その衝撃は「雲母」終刊宣言にも劣らないほどの波紋を広げている。総合誌はこぞって追悼特集を組み、全国に五百とも八百ともいわれる結社誌においても追悼句や追悼の記事が並んだ。龍太逝去の報に触れたほとんどの俳人がその偉大な足跡を称え、深く死を悼んでいる。

作家研究はその死後に本格的に始まる。飯田龍太の十の句集の中から第一句集『百戸の谿』をひもとくとき、二十代から三十代前半の作品の考察を試みる。龍太は、俳人として屹立する父蛇笏が認めざるを得なかった優れた作品を詠んでいるが、龍太にとって蛇笏は生涯にわたって仰ぎ見る俳人であり、超えなければならぬ存在であった。それは甲斐の国を巡る峻厳な山々のようなものであった。長く昭和の俳句界のリーダーであった龍太の生涯の課題は、最も身近に立ちふさがっていた師であり父である蛇笏を超えること、ある時には閉塞感を与えられもしたが作品の対象となり詩精神を練磨してくれた甲斐の連山を超えること、であったかもしれない。龍太は、戦争の時代に青春を送り、相次いで三人の兄を亡くして帰郷を余儀なくされた。作品を通して家郷に対しての葛藤やその山河への愛憎の跡をたどる。

1. 境川村 山廬

平成十九年の夏、山梨県笛吹市境川町の飯田龍太の山廬を訪ねた。新宿発特急あづさ号に乗車、石和温泉で下車、そこからはタクシーを利用するより足はない。駅前で客待ちをしている数台のタクシーの中から境川の飯田龍太家に詳しい運転手を探した。「飯田龍太先生の家に行きたいのですが……」と伝えると、「蛇笏だな」と応えて「蛇笏の家までは三十分二千円くらい、往復で一時間はかかるから貸切がいいよ、一時間で六千円」という交渉になった。運転手の言葉には驚いた。蛇笏の死は昭和三十七年である。昭和の俳壇をリードした俳人飯田龍太の名より父飯田蛇笏の方が通りがよい、言い換えると飯田蛇笏の知名度は没後四十五年の現在においてもその子龍太以上に高いという事実を目の当たりにした。

笛吹川の土手に沿って走った。行く手にも背後にも左右にもぐると山々が巡っている。これが甲府盆地の地形である。ようやく梅雨明けした暑い日であった。運転手は「地元の者にもほんとに夏ばかりは我慢ができない」と地形特有の暑さを嘆いた。ところどころに桃畑が見え、美しく色づいた実が袋からこぼれていた。桃はもう終わりに近いということだったが、青々と葉を繁らせ、枝を伸ばしたそここに紅の大きな実をたくさんつけている光景は、旅人の目を十分に喜ばせた。大きな実であった。白と紅と黄色が交じり合いしっとりと重みを垂れた桃の様子は、ふっくらとした飛鳥美人の容顔を思わせた。花の頃にはまた異なった景色を見せることだろう。山梨が桃の産地だとは知っていたが、龍太の著作を通して想像していた境川村とは違って華やかだった。だが、これが晩年の龍太が通院にあるいは町に出る折々に必ず通った道である。龍太の見慣れた景色を見ることに気分が高まった。

途中、「蛇笏のお墓がありますよ、行って見ますか」と案内された。そこは、龍太の随筆や蛇笏の弟子が師を偲んで詠んだ句から想像してきた墓地の地形とは少し違っていた。道中に見た桃畑と同じように見事な実をつけた桃畑が隣接し、地続きには茄子やトマトなど食べごろの菜園が見られた。山に近いが、山墓というより人家に近い。土地に「飯田家」は多く、蛇笏の墓は容易に見つけられなかったが、運転手は自分の記憶をたよりに汗だくになりながら根気よく一基づつ見て歩き、筆者も丹念に探し、ついに、何度も行き来した最も道の辺に位置したところに見つけた。昔からの共同墓地であった。

正面は「真観院俳道椿花蛇笏居士」「清観院眞月妙鏡慈温大姉」、背面は「昭和三十九年秋彼岸 飯田龍太建立 龍沢宗淵書」、右面には「昭和三十七年十月三日古 飯田武治」「昭和四十年十月二十七日古 飯田菊乃」とあった。武治とは蛇笏、菊乃はその妻、すなわち龍太の父と母である。大人の背丈を越す墓に交じって腰の高さほどの小さな墓があった。「清純浄香 積童女」と彫られた墓はいかにも童、それも女童に相応しく、小さかった。龍太の次女純子六歳の墓である。

蛇笏は、三人の息子を戦争や病気で次々に亡くするという苛酷な運命に見舞われたが、当時の多くの国民のごとく耐えに堪えて涙を見せることはなかった。その蛇笏が稚い孫娘の死に際しては堰を切ったかのように号泣したことを龍太は記録している。龍太の記述や俳句は家族に関する部分では常に抑制されており、また、蛇笏を家族の一人として描写したものは極めて少ないが、この部分ばかりは人間蛇笏を強く感じさせ、蛇笏・龍太父子と家族の結びつきに強い感動を覚えた。その部分を筆者は一読者として、角川学芸出版の『飯田龍太全集 全十巻』のクライマックスのように読んだ。蛇笏・龍太の人と作品の魅力とはこの家族愛および人間への愛を根底にするのではないか。墓とは最も鮮やかに一族を物語る。龍太には亡き子を詠んだ次の句がある。

露の土踏んで脚透くおもひあり

句集『童眸』(昭和31年 36歳)

枯れ果てて誰か火を焚く子の墓域

句集『童眸』(昭和32年 37歳)

目を転じると実もたわわな桃畑があり、少し歩くと茄子やトマトの菜園があり、里山が続く

彼方に山々が眺められた。

山廬と呼ばれる蛇笏・龍太の住まいは坂道を登りきったところにあった。雑誌等で何度も目にしてきた山廬がそこにあった。背の高い門柱があり、それに並んで紅の百日紅の大木が花をつけていた。母屋の前には鮮やかな緑の見事な松が幹を立て長い枝を伸べていた。人が数人は乗れそうな大きな敷石はじめ大小の飛石が玄関へと続いている。玄関には大きな甕が置かれ一本の蔦が挿されていた。式台の上の簾は巻かれたままであった。想像するのみだが、家の中には囲炉裏が切れ、自在鉤がかかっているのだろう。使い古された机も置かれているだろう。家人の姿はなかった。下駄履きの龍太、着物の龍太、談笑する龍太、酌み交わす龍太等等など、新聞・雑誌に掲載されたたくさんの写真を見てきたが、それらの多くがこの山廬で撮られたものだった。その龍太の姿はなかった。運転手は「奥さんは入院中で、誰もいないんですよ。優しい先生でした。先生は奥さんをととても気遣っていたのに自分が先に逝ってしまった。亡くなる半月ぐらい前に病院にお送りした時は、まだ、お元気でした。」と言った。「よくお供した滝があるんですが、まだ時間があるのでそこに行ってみますか」と車を走らせてくれた。鬱蒼と樹木が茂り、水が湧き出、盆地の暑さを忘れさせる涼しさ、蟬の声、水音、樹木……これらが夏の龍太を包み込んだ自然だった。これも龍太の遺品のように思った。

駅までの道のり、「先生がお好きでよく買い物をされたコンビニアスターがありますよ、いつも車を止めて買い物をされた。便利だなとおっしゃって買い物がお好きだった、右手のそこですよ」と教えられ、そこここに龍太の日常があったのだと思った。コンビニの向かい側のJAに立ち寄って見事な桃を求めた。送り先の知人には「境川の桃」に感動させたかった。笛吹川に沿って車を走らせ、その景色も龍太の見慣れたものだと思うだけでうれしかった。「日本のどこにでもある田舎」と繰り返し書いているが、そこに定住することによって、蛇笏も、龍太も、優れた作品を遺した。中央から離れたところにどっかりと居住しながら山廬を稀にみる文学道場とした。俳人ばかりか文芸にかかわる有名無名の多くの人々が日本中から訪れ、大きな影響を受け、自らの活動に昇華してきた。山廬をひそかに訪れる人は少なくなかったようである。筆者のように山廬の周辺を歩き、墓を訪ねるだけで満足して帰途につく人々も少なくないことを龍太死後の特集記事などで知った。「俳句研究」の追悼特集の中で大串章はく私も境川村をひそかに訪ねた者の一人であった」と記し、その他の多くの追悼文中にく私もくと同じ行動を告白する記事を見、改めて多くの人々を引きつけた山廬の磁力を思った。

以下、龍太の第一句集『百戸の谿』を中心に考察する。句集『百戸の谿』は昭和二十八年三十三歳までの作品をまとめたものである。龍太は昭和十三年十八歳で上京、二十歳で国学院大学に入学、病気のため帰郷を繰り返し、卒業は昭和二十二年二十七歳であった。戦況は激しさを増し、五人兄弟中の龍太をのぞく四人が出征、三人の兄を戦地で亡くしている。そのため故郷境川村に定住することを余儀なくされた。句集名についてはあとがきに「生まれてから三十余年の今日まで、その大部分を過した溪谷の部落は、おほむね百戸ばかりである。眺められる

風光に、さしたる変化が見られないごとく、恐らく、三十年前の戸数に、何ほどの数も加へられてはゐまい。録した作品の過半を生んだこの地にちなんで書名とした。」とある。また、「今はもうともにこの溪谷に還つて眠る三人の兄等の霊前に、一書を捧げる」ともある。

2. 紺緋

紺緋春月重く出でしかな

(昭和26年 31歳)

井上靖の『しろばんば』をはじめとする自伝小説や下村湖人の長編小説『次郎物語』などは、ある時代の少年像を描いて多くの読者に長く読み継がれてきた名作であるが、普遍的な青年像を詠んだ龍太のこの一句も、長編小説に匹敵する不朽の名作として長く読み継がれていくものと思われる。『しろばんば』や『次郎物語』の読者は、主人公の姿に自らを重ね合わせて、あたかも自分の生立ちの記をひもとくような懐かしさに包まれる。再びは戻り来ない時代への懐かしさだけではない。健気さ、純粹さ、子供らしさなど、現在の自分を形成する土台を築いたかけがえのない心がそれらの小説の中にぎっしりとつまっている。「紺緋」の一句は、すでに青春期を過ぎた読者をして未来に一步踏み出した頃のまばゆいばかりのスタート点に立ち戻らせる。青春期とは、甘く、重苦しく、悩ましい時代であるが、しかし、未来への希望と自信に包まれた力あふれる時代でもある。若さという最大の武器を持った者は、恐れや躊躇いなどという負の要素を押さえ込んでぐいぐいと前進していく。「春月」はそうしたエネルギーに満ちた若者の内面を象徴するかのよう、あるいは若者の挑戦を正面から受け止めるかのように重々しく、空にかかっている。春宵のしっとりとした大気に触れて濡れて潤み、存在感を示す。紺緋の青年と重々しい春月が拮抗するかのよう描かれ、青年の前途を暗示する。青春期の読者が読めば自らの現在地の確認となり、中高年に対しては自らの通過点への回想、そしてその後の軌跡をたどらせて、感慨を深くさせる。

龍太の初期の代表作としてこの「紺緋」をあげる者が圧倒的に多いのは、井上靖や下村湖人の名作に共通するものを見出すからだろう。世代が共有する文学には普遍性がある。紺緋はそこに登場してくる少年たちの日常着である。丈夫で洗濯に耐える。洗えば洗うほど強くなり、着心地がよくなる。現在ではむしろ粋な素材となっているが、当時は普段着や作業着に用いられた。衣類は時代を雄弁に語り、個人にとっても折々の事柄をリアルに再現させるよすがとなる。その手触りや着心地とともにそれを身につけていた頃の自分の身の回りを覆っていた社会や世界や時代の空気までも思い出させる。紺緋は青年龍太、すなわち読者そのものの肉体と精神に重なる。紺色の深さと若さ、緋の強さと日常性が普遍の青春自画像になる。

龍太は自選自解で次のように記している。

く子供のころは、もっぱら久留米緋を着た。兄から順にお下がりを着せられた。着古すとだんだん緋のもようがハッキリ浮かび出してくる。年ごとに柄模様の小さなのに昇格し

た。模様的大小によって、兄弟の貫禄に差をつけたのだろう。〉（『飯田龍太全集第9巻』角川学芸出版より。）

春の鳶寄りわかれては高みつつ

（昭和21年 26歳）

大きく輪を描いてゆっくりと空を舞う鳶の様子を目にすると、飛ぶ鳥ならではの技を授けられた果報を思わないではいられない。両羽を真っ直ぐに開いて、浮遊するかのように中空を悠々と旋回する。羽ばたくという鳥らしい動きを止めて紙飛行機のように、それでいて生き物ならではの柔らかな曲線を描く飛び方は、自然界が不思議に満ちあふれ、魅力尽きないことを思わせる。人家に近く、四季を問わず見られる点で珍しい種ではないが、鳶が舞う空は人々の目を誘い、自ずと上空を仰がしめる。

鳶そのものは季語にはならないが、鳶にも春は恋の季節となる。うらかな春の空を二羽の鳶が近寄っては離れ、離れては近づく。語らうかのように、囁くかのように、駆け引きをするかのように、繰り返す。人の目がないとはいえないが、これ見よがしというのではなく、密やかにというのでは全くなく、鳶と生まれ、春に巡り合わせ、命を謳歌する風景である。次第に高みへ、高みへと昇りつめていく。恋という俗を詠みつつ、俗を離れ得たのは、「高みつつ」によって鳶の習性に精神性を反映させられたことによる。山国甲斐の見慣れたこの自然を新鮮な風景として若き龍太が心ときめかし、飽かず眺め、眺めては青春の情感を育んだことが思われる。否、龍太でなくともよし、普遍の青春像である。第一句集『百戸の谿』中の最も初期の代表作である。

この句については自句自解に次の記述がある。

〈「雲母」に出句した原句は「春の鳶寄りてはわかれ高みつつ」であったが、蛇笏がこのように加筆した。蛇笏加筆の句は、私の作品の場合、この一句だけであったと記憶する。なるほど原句に較べ、加筆された表現の方が調べがいい。調べに乗ってゆるやかに飛翔が高まる。〉（『飯田龍太全集第9巻』角川学芸出版より。）

夕されば春の雲みつ母の里

（昭和23年以前の作）

「夕されば」という伸びやかで古典的詠み出しが懐かしい時空へといざなう。幼い頃の思い出の場面を再現してみせるのは「春の雲みつ」長閑に甘い風景である。「母の里」は若い母に付き従って幼い自分が訪ねて行った所であり、行けば祖父母が優しく迎えてくれた所である。その道中、先になり後になりして花を摘んだり歌ったりしながら野道を歩いて行った。自分もうれしく、幸せそうな母の様子がいっそう子供の自分を楽しくさせた。伯父、伯母、たくさんの従兄弟たちがいて、昼も夜も楽しく、食べるのも寝るのも何をするのもうれしかった。「母の里」はそのような楽しさにあふれた昔の一日を呼び起こす。子供心が捉えた「母の里」は長

じるにつれて少しずつ変形し、思い出の上に思い出が重なって一色ではない「母の里」になっていく。

3. 露の村

龍太の人と作品は、その家郷甲斐の山国に住まいすることによって生まれ、それ故に類まれなる尊敬を集めることになった。生前も死後も多くの人々の足をその地に運ばせるのは、龍太その人と作品と山国の魅力故である。龍太は甲斐の自然が生み出した俳人である。しかし、若き龍太の家郷に生きる故の葛藤や煩悶は、「龍太すなわち甲斐の山国」と認識する読者の想像を超えるものであった。第一句集の段階では、自らの宿命を受け入れるに至っていないと思われるが、その心の軌跡をたどる。

野に住めば流人のおもひ初燕

(昭和 24 年 29 歳)

燕は春の訪い人である。燕尾服の名の通り正装して遥かな土地からやって来る。一直線に高く低く勢いをつけて飛んできては曲芸めいた燕返しを見せて飛び去る姿は、自由闊達、清々しい。野は春の光があふれ、命あるものの息吹が充満する。躍動する力を初燕に見る一方で、「流人のおもひ」に苛まれ、またしても自問自答する。流人とは厳しい言葉の選択である。現代風の「負け組」は相対的分類になるが、自ら流人を名乗るのは絶対的な自己認識である。過去の自分と何かを放棄した後の現在の自分。何かを諦め、何かを選んだものの、後者に甘んじることができない自分に苦しむ。野といっても他郷ではなく、故郷である。父母が住み、幼い頃の思い出が残り、離れては焦がれるこの世で唯一絶対の場所である。もとより憎むのでもなく嫌うでもない故郷である。逃れられないえにしを重んじつつも虚無感に襲われる。開放的な野にしながら閉塞感に苦しみ、目に見えないものに阻まれる。地方に暮らす故にもたらされるものと失うもの間で苦悶する。現在も未来も限定された者の運命的な寂しさが伝わってくる。作者は後に、「俳句は地方の文芸である」と考えるに至るが、それまでの年月には免れがたい苦悩があった。流人とはいえこの句に自虐性や戯画化の印象はない。今日の日本はいろいろな面で急速に格差が広がっているが、それによる「流人のおもひ」とは異なる。豊かな自然と安定した経済力に裏打ちされた健全な暮らしが前提にあっての精神の流人である。「野」は「や」と読むと意味が違って来る。在野または野に下るという言葉がある。結果的には蛇笏・龍太というしかるべき人材が野にいることによって日本の伝統文芸としての俳句が地方の文芸として一時期を画し、「山廬」が数多くの優れた俳人の研鑽の場となったことは文芸の奇跡というほかない。

露の村墓域とおもふばかりなり

(昭和 26 年 31 歳)

露の村恋ふても友のすくなしや

（昭和 26 年 31 歳）

勉学や就職などの理由で一度は郷関を出た者が若くして再び戻って暮らす気持ちは単純なものではないだろう。異郷で思う故郷と生活の場としての故郷には違ったものがある。故郷の風土への親しみの情と、地縁の深さ故の複雑な感情や自らの夢などの間で葛藤が起こる。もとより故郷を憎むものではないが、自分の可能性を阻止するよからぬもの、目には見えない敵のようなものが故郷というところには潜んでいる。無意識的にそのように意識する感情がありはしないだろうか。故郷は恋しくかけがえのない土地である。にもかかわらず、故郷に定住することにどうしようもなく涙が流れる。過疎化や格差の進む現在のことではない。地方には地方ならではの落ち着いた穏やかな確かな暮らしがあった時代のこと、今ほど都会が刺激的ではなかった時代のこととしても、である。故郷に定住の覚悟をしつつ、何かしらどこかしら寂しいという感情を禁じえない。日々平穏なたつきが営まれていることに安らぎつつ、それでもどこかでないものを求めてやまない感情を消し去ることができない。

墓とは過去の時間である。墓からは未来を展望し難い。故郷で描いた夢は故郷では実現し難く、夢を語るに同志はいない。語り合った友も兄も去ってしまった故郷の村にいる虚無感を「露」が覆う。

露に覆われた村のたたずまいはしっとりと心にそう。やや高みから一村を見渡す。点在する家屋が織り成す一つの秩序に安堵する。人が死ねば弔いをし、墓を守ることは村の秩序として大きな位置を占める。極言すれば故郷とは墓のあるところ。村一つを墓域とするこの虚無感、顔見知りの誰彼がすでに墓の下に眠り、いつしかその数が増えていたという歳月があつてのことである。世の常として受け入れられる。それに加え、時代の背景を重ねると、「露の村」は果てしなく露けさを増し、濃く深く影がそう。戦後まもない村を前にしての作となると、この句はいかにも重い。子供の頃、兄たちと一緒に遊び、喧嘩し、教えられ、可愛がられた記憶。すぐそこにある思い出。兄を基準に人生を描いたこともあつただろう。それらの日々はまだまだ手に触れられそうな時間的距離にもかかわらず、再びはまみえることはできない。若くして死んだ兄の眠る村を一望して村全体を墓域と思う。当時、次兄を病で、長兄・三兄を戦地で失っている。この当時、日本中の村々が「墓域」のようだったのではないだろうか。

自選自解では次のように記している。

くあまり取り上げたくない句だ。感傷の部分が多すぎる。時に三十歳。すでに青春晩期といったところだが、こんなおもいも嘘いつわりのない当時の感慨であつたとすれば、それも致し方ないことである。戦後数年間の、皆をつり上げて過ごした時期が、いつか夢のように去って、峡中の人とところを定めてみると、あらたな虚しさがこみ上げて来た。（略）感傷というより自嘲のにおいが強い。（『飯田龍太全集第9巻』角川学芸出版より。）

露の村にくみて濁りなかりけり

（昭和 27 年 32 歳）

しっとりと露に覆われた村のたたずまいは心にしみて愛するにたる故郷である。素朴でありふれており、それでいてただ一つの特別な村である。旅の途中で見た村でもなく、広く村一般でもない。逃れ得ない地縁で結ばれた村すなわち作者の現在地である。愛惜とそれ故の憎悪が闘ぎ合う。両者の力は常に一定するものではなく互いを浸食しあう。憎しみは澱むもの、澄みわたることのないものであるが、その憎しみに濁りが無いことに気づいている。「なかりけり」は「ないことだよ」という深い詠嘆を表す。自らの憎しみの正体をよくよく見つめてみれば憎めば濁るはずであるのに逆に透徹した感情がある。攪拌すれば濁り、時間を置けば再び澄んでくる。濁りをはらみつつ、濁りを沈殿させる装置、それが心というものか。「露の村」が作者の故郷観であり、中七下五は上五の補足の関係にある。

梅雨の川ころ置くべき場とてなし

(昭和 27 年 32 歳)

「故郷の山や川」といわれるように川は普通故郷を形成する大きな要素となる。龍太作品にしばしば登場するのは屋敷のすぐ後ろ側を流れる狐川という小さな川であり、朝夕の散策や野良仕事など生活の場とも庭の一部ともなっていたようである。その狐川と限定することはないが、清らかな水の流れは思索をするにも散歩をするにも恰好の場となる。だが、梅雨時の水嵩を増して濁流となって流れる川には自分の心を反映させることはできにくい。身の置き所を求めることはすなわち「ころ置く」のに適当な場所を求めることである。戦争という苛酷な時代が故郷との結びつきに変化を強いたことは容易に想像できる。

故郷といえど共に育った兄弟と切り離すことはできない。五人兄弟のうちの三人の兄を戦地で亡くしているという事実をこの句から差し引くことはできないだろう。兄の面影を呼び起こす川でもある。重たく流れる川の流れは兄たちの命を呑み込んだ時代の激流に重なったかもしれない。自らの前途を塞ぐかのように感じられたかもしれない。

また、百戸ほどの村に住む煩わしさを次のように詠んでいる。

親しき家にもくきも茂りゆたかなり

(昭和 27 年 32 歳)

闇暑しことに隣家をおもふとき

(昭和 27 年 32 歳)

梅雨の月べつとりとある村の情

(昭和 27 年 32 歳)

4. 農に倦み

農に倦み花栗にほふセルの夜

(昭和 24 年 29 歳)

百姓の昼寝熊蜂梁を打つて去る

(昭和 24 年 29 歳)

百姓に翳の想ひや秋しぐれ

(昭和 27 年 32 歳)

百姓のいのちの水のひややかに（昭和 28 年 33 歳）
百姓の冬の洗面大きな音（昭和 28 年 33 歳）

自選自解において次のような記述がある。

〈この頃の私の作品を見ると「百姓」という文字がところどころに出てくる。いまは嫌いな言葉のひとつだ。（略）私が言葉として好まぬという気持には、対象に距離を置いたアイマイさがあるためだ。そのアイマイさとは別の姿である作品なら、それほど毛嫌いはいしないことにする。〉（『飯田龍太全集第9巻』角川学芸出版より。）

百姓が知りはじめたる秋の風（昭和 27 年 32 歳）

唐の詩人劉禹錫は「秋風引」と題した次の詩を残している。

何処秋風至（何処より 秋風至る）
蕭蕭送雁群（蕭蕭として 雁の群を送る）
朝来入庭樹（朝来 庭樹に入る）
孤客最先聞（孤客 最も先に聞く）

秋風を真っ先に聞き分けたのは一人ぼっちの旅人この私であったという内容である。劉禹錫は当時の政界においては改革派に属し、左遷や筆禍事件などの憂き目に会っている。一人異郷にある孤独な心が秋の季節に鋭敏に反応したと考えられる。著名なこの詩を無視して龍太作品の鑑賞はし難い。「百姓」は句集『百戸の谿』の中でしばしば使われている言葉である。村人第三者を詠むものもあるが、この句では龍太自らを「百姓」として考える。龍太は相次いで三人の兄を亡くしたため、帰郷を余儀なくされ、家業の農事に従事した時期がある。飯田家は庄屋の家柄である。山村の生活においては農繁期ともなれば健康な者は男といわず女といわず田に出て汗を流さないということはある。公務員などの本職を持つ者も多くは兼業農家として、または近隣の手助けとして、田で働く。健康とはいえない龍太にしても百姓が生活であった一時期を過ごしている。歳時記は農事暦から作られたという説があるように、農業は季節や天候など自然そのものの中で営まれる。雨量、日照、霜、雪、台風などなど、折々の自然を観察し経験を踏まえて農作業の段取りがつけられる。秋風を知ることは秋の訪れを知ることに即ち仕事の計画を立てることにつながる。百姓龍太の生活が捉えた秋風である。そして、俳人龍太が秋という季節に鋭敏でないはずはない。秋風を最も先に知る者こそ詩人といえよう。初秋の風は満たされない心の隙間に忍び込む。満たされた心はそれに敏感ではあるまい。唐の詩人劉禹錫と同じく流離の孤影をこの句に見る。

新米といふよるこびのかすかなり（昭和 28 年 33 歳）

農業に従事する者の収穫の喜びとはこのようなものだろう。他者に対して誇示するようなものではなく、時間を経てじわりと湧いてくるようなものではないだろうか。表情は変わらず、言葉は多くはなく、それだから感情が乏しいというのではない。実りの秋に至るまでの農事のどれもが軽重の差はあっても常に肉体労働である。厳しい作業には自ずから寡黙になる。土と語り、空と語らいながら一年三百六十五日を働く。味方とも敵ともなる自然に委ねる部分も多く、人の力の限界に萎えることも少なくはない。収穫の後にも農事は続き、来年というはるかに向かって労働は継続する。だからこそ、収穫した新米に対する感情は一通りではない。

龍太は二十六歳の時、「農業世界」の論文募集に応じ、「馬鈴薯栽培法」で一等入選を果たしている。題目が龍太の農業への向かい方を物語っている。実践なくして机上のみでは栽培法を論じることは不可能である。いかなる仕事も創意工夫のないものはない。この一事から龍太の農に対する姿勢が安易であったとは考えられない。真剣に取り組む故に収穫したばかりの新米を目の前にした喜びをじわりとかすかなものと感じたのだろう。

5. わが身をしたふもの

昭和十九年、龍太は二十四歳で長女公子を儲ける。二十五年には次女純子、二十七年に長男秀實、三十五年に三女由美子が誕生している。身ほとりには兄の遺児もいた。

風邪の児に医師来診の灯をともす (昭和 20 年 25 歳)

春蟬にわが身をしたふものを抱き (昭和 24 年 29 歳)

など、我が子に限らず子供を対象にした句が多い。「わが身をしたふもの」は兄の遺児である。

抱く吾子も梅雨の重みといふべしや (昭和 26 年 31 歳)

陰鬱に降り続く梅雨の頃である。屋内としたい。座った姿勢としたい。降られて戸外に出られない幼子が座っている父親の膝に滑り込んできた。膝は心地のよい遊び場所である。我が子の思いのほかの重さ、その重さにもずしりとした季節の重さを感じた。抱かれた方には雨の日の漠然とした心地悪さから安堵感への変化があり、抱いた方には一種の戸惑いがある。我が物と思えば軽いはずの吾子を垂れこめた梅雨の重みと感じた。ほのかな温みが互いの衣類を通して伝わってくる。温みにも重さがある。梅雨にも重量がある。何日も続きまだまだ続く雨の季節の一日に、皮膚が「重み」を感じたのである。たとえば雪の降りしきる日にこの感覚はない。この句について作者自身は「どこか暗い感じだが、理由は多く勤めの上の倦怠にあったようである」(『自句自解 飯田龍太句集』)と書いている。

冬ふかむ父情の深みゆくごとく (昭和 28 年 33 歳)

自句自解によると「父情」は母情に対する語としての造語のようである。冬に対しての対義語は春となる。母情はたとえば春の野原のように空間的には横に広がり、植物も動物も優しい表情となり、その対立軸を考えると、父情は縦すなわち目には見えない地下深くへ伸び、生き物の自在な活動を阻む厳しい表情となる。どちらも育てることにつながるが冬は守りの構えとなり、長い時間の経過という忍耐の果てによく芽吹きへと導く力がイメージされる。この句は冬がテーマであって、父情を「冬深む」ものと詠んだのではないが逆も成り立つ。作者の父情観と考えられる。制作時三十代の作者に父蛇笏があり、自らも若き父であった。龍太俳句から父の子として、子の父としての情を除くことはできない。しんしんと冬が深まっていく。厳しく固く締め付けるように冬が本領を示し始める。妥協のない冬のように父情もまたゆるぎないものを育んでいく。

餉につくや父知らぬ子と露の夜を

（昭和 22 年 27 歳）

夕餉の卓につく。時節柄、一汁一采の質素な食卓が浮かぶ。質素ながら夕餉の幸せはある。祖父母以下三世代あるいは複数の兄弟の家族も同居した大家族だろう。大家族のよさはある、誰かの代わりを誰かが担うことはできるものの、父や母という名が担う役は本質的には代用できない。物を食べる子供の様子はいつの時代も心が和む。どんな時でもそれは変わらない。無心に食べている境遇を理解しえない子をじっと見つめ、耐えがたく目を逸らし、行くさ来るさに心乱れる。父の記憶のない不幸せがどのようなものか。抱かれ見守られる一方で叱られるも諍いもすることがない人生が豊かであるはずがない。人間の自然な感情を育むのに父不在、生涯に亘っての長き不在を哀れむ。現代的な家族の悲劇ではなく、神のみが下す悲運でもなく、人間が元凶となった戦争による「父知らぬ子」である。夕餉についての家族を包んで夜の帳が下り、あたりにはしつとりと露が下りている。考えれば至りつく怒りを抑え、季語「露」、この心惹かれるものに俗世のことごとくを昇華した。「昭和二十二年九月兄鵬生戦死の報あり」という前書がある。

炎天の巖の裸子やはらかし

（昭和 28 年 33 歳）

今夏は、猛暑とも酷暑とも表現し足りない暑さに見舞われ、電力消費も連日最高を上回る日がつづいた。大都会だけのことではなく、列島を覆う不気味な異変に怯えたことである。だが、中高年の多くが暑さも暑いながらもただ炎帝のみの力に打ち伏す暑い夏を記憶している。日本の夏は暑いと決まったもの、それだから家屋は夏を旨とすべしと言った古人もいて、それを凌ぐ工夫や小道具を発明してきた。今夏ばかりはそれらも無効かと思ったものだが、この句は遠い昔の混じりけのない純粹に暑かった夏の日の涼しさを思い出させてくれる。太陽は直接に地上

のものをじりじりと焼いた。汚染を知らない空気は直に日光を透した。人々は炎暑という太陽の力に平伏した。そんな午後は子供たちは村を流れる川に行った。大きい子は泳ぎ、潜る。小さい子も水に浸かって飛び跳ねる。夢中の子供たちに大人の目は厳しく、時間を決めては全員を水から上げて休憩させた。その時間の何と勿体無かったことか。一瞬でも水に入っていたかった。脱いだものは川原の叢や岩の上に放り投げておいた。いよいよ小さな子は真っ裸にしておいた。裸子のその白く柔らかい肌は年長の子の日焼けして鋼のように黒光りするのとは対照的だった。少年と比較しても別物のようだった。生まれて初めて夏を経験する肌かもしれないその初々しさが目を射る。炎天という容赦ないもの、巖という頑強でごつごつしたもの、そこに配された裸子がこの上もなく愛しいもの感じられる。愛しいと思う心は炎天下にあって涼しさを感じさせる。このような暑い暑い夏があった。

6. 山河はや

山河はや冬かがやきて位に即けり

(昭和28年 33歳)

山も河も早くも冬となり、寡黙に聳え、また流れていく。山々は削ぐものは削いで眠りに就き、川は広々となった川原を伴ってはるかにつづく。山河に訪れた冬は冬らしく厳しく貌を整え、確固たる風貌で、もはや些細な事柄には応えない。「位に即く」は「即位」という熟語になる。冬が冬の地位についた。燦然たる姿は近寄り難く、冬の厳然たる本性そのものである。

選択の余地なく定住した地は故郷という運命の地でもあったが、家郷への複雑な思いは大きな振幅を持ちつつも年月を経るにつれてしだいに定まっていった。また、自然に対する姿勢はこの句に見られる通り、俳人としてのスタートの時点から、というよりか物心ついたころから一貫したものがあのように思われる。

いきいきと三月生る雲の奥

(昭和28年 33歳)

三月は人々が心待ちにする月である。その三月は「生る」る月であるという発想が新鮮である。春も夏も秋も冬も「来る」「訪ふ」「忍び寄る」ものである。月はどうか。三月以外は「来る」か「なる」と表現し、「～生る」という言い方はしっくりしない。三月は誕生する月であるという発見に三月への人々の気持が表現された。「来る」ものも待たれるが、誕生するものへの喜びや期待には及ばない。その春三月が「いきいきと」躍動する。平易な擬態語がその躍動感を目に見えるかのようにリアルに表し、誕生間もない季節が見る見る膨らんでいくような立体的な印象を与える。鋭敏な目や耳は春をその器官で捉えることができ、これといった花や囀りなどの具象を以ってしなくても、風の色や雲の形などに変化の兆しを確かに行うことができる。三月という事実が春を誕生させるのか、三月だと思ふことが春を生ましめるものか。

流れる雲、垂れ込める雲、浮かぶ雲など、空の表情は繊細に、大胆に、刻々と移り変わる。例えば大海の上や連山の上など、地形の違いももたらすものを違える。三月の産屋を「雲の奥」とした感性は、剥き出しの自然に近く生育し山国甲斐で生活をするという経験が磨いたものではないだろうか。

俳人中村苑子はこの句について次のように記している。名作の力を示すものとして引用する。

〈その当時、私は大きな悩みごとのために毎日を鬱々と暮らしていた。精神的な落ち込みでぬけ出す方途もなく、死ぬよりほかに解放される道はないとまで思い詰めていた時に、偶然この句に出合い、吸い寄せられるように惹かれて見詰めているうちに、しだいに心の眼が開かれていく感じがしてきた。厚く立ちこめていた冬の暗雲の一ヶ所が切れて曙光が射し、その奥に春の兆しがいきいきと生れ出ている、と観じたのは、私の誕生日が三月のためなのか。ともかく、新しい別の自分が雲の奥に誕生しているのがほの見えて震えるような思いで私は蘇生した。あの時、この句によって魂が呼び戻されたのだと、あとになって気が付いた。〉（『俳句研究』1993年3月号より。）

炎天や力のほかに美醜なし

（昭和27年 32歳）

断定の強さが鑑賞を拒む。龍太はその随想や俳論で名句には鑑賞は不要だと繰り返し述べている。例えば芭蕉の〈この秋は何で年よる雲に鳥〉〈文月や六日も常の夜には似ず〉などをしばしば名句の例として挙げながら鑑賞も解釈も要らないという一語の他を叙さない。複数の解釈が成り立つとしても、名句は解釈も鑑賞も要らないという持論は、筆者には衝撃である。龍太作品には容易に解釈や鑑賞が出来難い句が多い。この句もその一つである。

季語「炎天」をクローズアップし、炎天すなわち力と言い切った。真夏の容赦ない太陽は力そのものであり、力こそ美でもあり醜でもあるという強い詠出である。美と醜との間にあいまいな中間点がないことを表し、美か醜かのどちらかだというのである。この世に美醜という判別がもしあるならば、沸点に達した炎暑の戸外こそ美であり醜でもあるとした。美と醜は相反する概念である。万物を屈服させる炎天の威力に打ち勝つ力があればそれすなわち美であり、同時に醜でもある。炎天に打ちのめされるとすれば美醜の判定にも値しない。それほどの厳然たる威力が炎天の本意である。

露草も露のちからの花ひらく

（昭和27年 32歳）

露草は雑草の一つであるが、これほど日本人の心を捉える雑草の花はないのではないだろうか。まず名前がよい。命名は露草の手柄ではないが、そのように名づけさせた力は、露草の手柄である。視覚が捉えた花の印象がいかに美しく、その深く澄んだ青い色には人の心を吸い

取る力がある。美しい瞳に見つめられて見られた方がかえって相手に魅入られてしまうような深遠な趣がある。犬ふぐりの青色にも似た美しさがあるが、犬ふぐりが群生して数で虜にするのとは違って、露草はただ一花で人を虜にする。露そのものものと見まがう清らかさである。露への日本人の思いには並々ならぬものがある。露が広げる清澄で凜然とした趣は、日本人の精神の理想と言っても過言ではない。露のはかなさは日本人の感性を刺激する。露草もはかない。はかない花を咲かせるものがはかなくも清らか露であるというところに深い共感が集まる。露に濡れて花は一段と風情をそえる。はかないものがはかないものを、清らかなものが清らかなものを育む中に毅然とした美を見出す。露草が雑草たるゆえんは実に強靱な生命力にある。根を張り、場所を選ばない。それでいて汚れなく美しい。草の葉に露が結ぶように、清らかな青い花を咲かせる。露が膨らむにも力が要る。そのように露草も清らかな力を結集させて一輪を開かせる。

7. 山廬永訣——飯田龍太追悼句より

龍太は「～永訣」と題した数々の追悼文をものしている。どれも作品と人柄にふれ、感銘深い。その龍太との永別にあたって多くの俳人が追悼文および追悼句を発表した。有名無名を問わずその数はおびただしい数に上っている。あらためて龍太を物語るべきことである。それらの中より一部を取り上げる。

山の奥に山あり春の奥に春	高橋睦郎
重畳の芽吹は山の怒涛かな	ク
龍太の代在りしと思ふ芽吹山	ク
春月のみどりうるみぬ忘れめや	ク
秋の蛇笏春の龍太と偲ぶべし	ク

(「現代詩手帖特集版 飯田龍太の時代 山廬永訣より」より。)

一句目。山国甲斐の地形から詠み起こし、その地に確かに存在した飯田龍太の人となりに迫る。山の中の山すなわち本格的な山は、その奥まった位置に存在してたやすくは表れ出ない。分け入って訪ねる者には惜しみなくその本性を見せ、道しるべを指し示す。季節の春は春の喜びを人々が忘れかけた頃合にその最も成熟した力で森羅万象を包み込む。十七音の中に二度用いた山は同じ山ではなく、前者は一般的な山、後者は本格的な山とし、春も後者の春がその本意を体した春とし、飯田龍太の本性も幾つも山々を越えて行った先の山、春もたけなわのような存在だとする。春の懐は深く、その恩恵は無尽である。生きとし生けることごとくを育て春は四季にさきがける。奥の奥に存在するものをほのめかし、そこに偉大な龍太を置く。

山と春を漢詩の対句に準じるように詠み、格調ある端正な生涯を描いている。

二句目。幾重にも折り重なった山また山、その山並に春が訪れ、そこここに木々の芽吹きが

始まる。部分的に目覚めた山はおもむろに領域を広げ、やがて、次第に、そして、一斉に大音声を立て一本残らず活動を開始する。枝々の先の先まで遅れ先立ちながら。その勢いを山にして「怒涛」のごととした。波のように連なる山々の起死回生の営みの迫力である。静かなる怒涛はない。動かざる荒波はない。春の訪れは荒れ狂う大波となって山全体を覆い尽くす。その激しさ、季節の確かさ。龍太亡き山国に春がやってきた。

三句目。冒頭に書いたように、先日、山梨県笛吹市境川町の山廬の辺りを訪ねた。石和温泉で下車し、タクシーの運転手に、「飯田龍太先生の住んでいた家に行きたいのですが」と伝えられると、「蛇笏だな」と返ってきた。土地では龍太ではなく蛇笏であることに驚いた。「龍太の前に蛇笏あり」である。このことは龍太が超えなければならない文学史の事実である。そして、龍太亡き後の俳壇は、いや、生前、それも「雲母」を終刊し引退するはるかに以前から蛇笏の存在とは関係なく龍太を俳壇の頂点に位置付けていた。龍太自身がどう思っていたか、龍太が評論や随想の対象とした蛇笏は徹頭徹尾優れた俳人の一人という位置付けであった。きっぱりと清々しいものだった。この句の季語「芽吹山」は、蛇笏と龍太の親子のえにし、師弟のえにし、土地のえにしなど龍太の命の源へと遡らせる。

四句目。第一句集の代表作〈紺緋春月重く出でしかな〉を踏まえていることは言うまでもない。龍太亡き春の宵に東の空に上った月を見上げて、ゆかりある者もない者もこの句さながら龍太を偲んだことが多くの追悼文や追悼句に伺えた。空気の澄んだ秋の空は月をくっきりと輝かせるが、湿潤な春の空気はしっとり重量感のある月を掲げる。月も空気も人の目もうるむ。故人を偲べば心に兆す涙、緑を帯びて見えた春月。春月、すなわちあの名句。名句、すなわちその作者。思えば大変なことである。雪月花はすなわち季節を代表する美である。それを春の月に変換して「忘れめや」と言わせる。季語「春月」の名句は龍太に尽きる。

五句目。蛇笏の忌日は十月三日、龍太は二月二十五日。秋と春は対極にあり、昔から春秋論争が繰り返され、その優劣は決着のつかない詩歌史の永遠のテーマとなっている。だが、四季は一巡するならわし、その一つを取り出すことに意味はなく、戯れに比較しては相互の美を発見し、自然への感動を新たにす。

連山といふ冬囲まだ解かず	鷹羽狩行
甲斐の山々や龍太の忘れ雪	ク
梅・辛夷真盛りをもて喪に服す	ク
天楽を奏でよ甲斐の花こぶし	ク
鶴引くや甲斐の山々平伏し	ク
登仙のあとをとどめず大霞	ク
羽衣のかるさよ甲斐の春の雲	ク

二月下旬、甲斐はまだ「冬囲」が解けない。遅霜の懼れや寒の戻りは現代俳句が孕む数々の

問題を暗示し、俳壇の冬囲として龍太に依存するものを表しているように思う。甲斐の山々は峻厳かつ不動、ぐるりと巡る姿は仰ぐ者を深い感動で包み込み、抱かれ守られているという安堵感を与える。龍太の存在は甲斐の国を囲う連山そのものだった。

「梅」もまた龍太にふさわしい。梅は毅然たる春である。季節の兆しと言おうか。いや、俳句そのものと言っても許されよう。梅は他の花に先駆けて寒気の中に一輪ずつ開く。凜然とした姿は、樹木が蓄えたエネルギーの静かな爆発を思わせる。一輪の小が宇宙大の春を拓いていく。梅から広がる大きな世界が龍太であった。

告別式に一本飾られた「辛夷」のエピソードも感動的であった。この日を待ったかのように山廬に開いたという。〈春さきがけて山国の空をいろどる純白の辛夷の花を念頭にするとき、詩心の在り処はいよいよ清冽さを加える〉は、龍太の一文である。辛夷は「古武士」につながる。告別式後に放送されたNHKの『ラジオ歳時記』において、作者は龍太の風貌と精神をそのように語っている。

「喪に服す」のに「真盛り」が不謹慎にはならない。白は寂しくもあり華麗でもある。この矛盾が同時に成立するところが俳句の世界であり、追悼される人物の凡ならざる偉大さを物語っている。真っ白に真っ盛りであることの華麗なる寂しさが故人を深く追悼する。

「楽を奏でよ」と人々を代表して天に乞う。挽歌、葬送曲など人が奏でる音楽を超えるものを以って天上界へと導きたまへと願う。静かなる慟哭というべきか。

鶴もまた輝くように白い。引き鶴の先頭になって華麗なる集団を引き連れて彼方へと飛び去っていく。一羽が伴ったものはあまりにも大きい。世界の民話や神話は白い鳥を貴人の死後の魂に重ねている。遥かなる旅路につく故人を甲斐の山々が総出で見送る。聳え、動かざるはずの山々が平伏して故人を送る。甲斐の風土が生み出した芸術を讃えて平伏という作法で葬送に加わる。偉大な龍太は甲斐の山々が生み出し、甲斐の自然は龍太によって格付けされたともいえる。

最後の二句は龍太亡き後の駉蕩たる春を詠む。亡き後も在るが如く在る。霞棚引く美しい山国、雲を遊ばせる甲斐の国の穏やかさを龍太の遺品と見たのだろう。

七季語中六つまで、忘れ雪、梅、辛夷、霞、鶴、春の雲のどれもが偶然のように、いやそうなるべく白い。白が想像させるものが龍太像である。気品に満ち、しかも、親しく優しい。これらの追悼句が共感を呼ぶ理由は季語の本意と故人の人間像の一致にある。

七句中四句まで「甲斐」が入る。龍太は〈俳句は風土の詩〉と考えていた。甲斐を詠むことが龍太を詠むことになる。龍太の句、いや龍太そのものが、甲斐という山中に暮らすことによって創られた。甲斐の龍太、日本の龍太、昭和の龍太、すなわち不動の俳句精神である。